

日本のコミュニケーション再考

——インターモーダル・コミュニケーションをめぐる——

遠山 淳*

はじめに

人間にとってコミュニケーションとは、脳外から脳内へ、また脳内から脳外へと情報を「橋渡しする」内在化および外在化行為である。『唯脳論』（養老孟司）を持ち出すまでもなく、すべて脳の為せる業である。言語研究もチョムスキー以降は脳の中に理論化を求めているし、社会言語学研究も言語の周辺へと関連領域を拡大している。むしろコミュニケーション研究の中心は、言語コミュニケーションではなく、今や、非言語コミュニケーションやコンテキストという関連領域ぬきの研究では、この研究分野については語れないところまできている。コンテキストとは、言語化はされないが脳内にあって活発に情報行為が行われる素材である。現在、コミュニケーション研究は脳科学研究との相互関連性を無視しては既に成り立たない状況にある。

脳科学研究も部位の機能を中心とする研究から、細胞集合体（セル・アセンブリ）、つまりニューロン回路網にも大きな関心が寄せられている。ニューロン回路網にも「型」があり、情報に応じてそれぞれ回路を選んで

* 本学経営学部

キーワード：片立型、両立型、インターモーダル・コミュニケーション、
日本型コミュニケーション

いるらしい。ニューロン回路網には単用のものや耐用のもの、複数の回路に重用して働くものもあるようである。後述する「片立型コミュニケーション」や「両立型コミュニケーション」を想起させ、情報の内在化と外在化がコミュニケーションをめぐって相互に関連し合っているのではないかと言う思いがする。このニューロン回路網については櫻井芳雄（2002）¹⁾に詳しいが、脳内に内在化されている情報処理システムが人間に外在化されたコミュニケーションという情報処理システムとどのような関係にあるのか、という新たな研究分野が見えてくる。しかしこの小論文においては、この新しい分野をも一応視野には入れながら、コミュニケーション論の範疇内で展開してみたい。

なお、このコミュニケーション型の研究という分野には、先行研究がまだ内外共に皆無に等しい状況にある。したがって過去の文献研究を中心とする方法に頼れないという苦しい「家庭の事情」もあるということを予め断っておきたい。

II コミュニケーションにおける原型と階層的類型化

——“Culture-free”か“Culture-bound”か？——

コミュニケーション行為には3種の階層と8種の類型が認められる（遠山：1988a, 1988b, 1989, 1992, 1995, 1997, 2001, 2005）²⁾（図表1³⁾，図表2⁴⁾，図表3⁵⁾を参照のこと）。ただし、これらはすべて同じ志向性モード（Mode of Orientation）内のコミュニケーション（intra-modal communication）である。つまり、これまでの発表は同一文化内でのコミュニケーション（intra-cultural communication）をモデル化したものであった。すなわち、文化の影響を受けない（culture-free）コミュニケーション原型（prototypes of communication）という最基層、その上位にある中間層の志向性、最も表層にあるコミュニケーション型（patterns of communication）の3層

構造であり、上層にある2種の階層は文化の影響を受けやすい(culture-bound) (図表4を参照のこと)⁶⁾。今回の発表は異文化間(intercultural)でのコミュニケーションに関わる研究である。

この小論文では、これらの階層の内中間に位置する志向性というモード(Mode of Orientation)とコミュニケーション文化との関係に絞りたい。中でも、片立型と呼ぶモードと両立型と呼ぶモードとの間に発生するコミュニケーション、すなわち「異モード間(inter-modal)コミュニケーション」に絞り込んで議論を展開したい。

筆者はこれまで機会を捕らえては、いかなる文化にも、そのコミュニケーション行為には3種の階層と8種の類型が認められることを強調してきた。ただし、量的にもまた質的にも有意の差異は存在する。それらをまとめて「コミュニケーション文化」と呼ぶことにしよう。基本的には、文化が異なれば、コミュニケーション文化も異なるとしなければならない。同じ「関西」でも京都人と大阪人とは同じではない。電車でたかだか30～40分という時間距離である。それでも両者のコミュニケーション文化は異なる。神戸人もまた異なる。これまた大阪より30分の時間距離である。関西は決して一つではない。京都のタテマエ主義に対して大阪のホンネ主義。神戸は大阪ほどホンネは語らないが「エエカッコシイ」が多い。神戸人のコミュニケーション文化は大阪人も京都人も、大きく異なる。神戸人はむしろ東京人に近い。

日本人もアメリカ人も、中国人も韓国人も、どの帰属文化であろうともコミュニケーション文化を持ち、片立型コミュニケーションも両立型コミュニケーションも、両型とも日常的に用いている。ただその有意の差は、文化・社会全体の中でどちらの志向性が多用されているか、という量的差異、またどちらの志向性が文化・社会において質的優位性を占めているかにかかっている。分かりやすくするために、少し荒っぽいのが、一般にアメ

リカ人は片立型を多用し、日本人は両立型を多用する。また中国人も韓国人も両立型を多用する。ただし、彼らは片立型も多用するが、相手が身内や友人の友人・知人であることが分かると突然両立型に変化することが多い。このように志向性というモードが異なるとコミュニケーションが困難になりやすいし、少なくとも、我々日本人の心理状態が日本人同士でコミュニケーションをしている時のようには行かない——違和感に襲われるのである。片立型コミュニケーション文化を「しつこい」と感じてしまうことも多い。インターモーダル・コミュニケーションの難しい一面であるが、日本人が避けて通れない異文化間コミュニケーションの難問中の難問である。いくら相手文化を理解していても、いくら相手の個性を理解していても、こちら側が我々の両立型コミュニケーション文化を捨てない限り、日本文化でいう「真の」理解も、交流も、生まれない。「腹を割った」ホンネ関係にはなれないのである。このタテマエ関係のみに切り換えることは事実上不可能である。日本人が日本文化を捨てなければコミュニケーションが成立しないとは、一体これは何を意味するのであろうか。

外国語を使用している時も、日本語でコミュニケーションをしている時も、日本人にとっての最終の落とし所の理想のコミュニケーションとは、何でも話せるホンネ関係であろう。ホンネとはタテマエがあって始めて成立する両立型コミュニケーションなのである。そして日本文化においては、主流のコミュニケーション文化は両立型である。そしてまた、お隣の韓国人も、中国人も、アメリカ人も、イギリス人も、ヨーロッパ人も、ラテンアメリカ人も、アラブ人も、片立型コミュニケーションが主流であり、両立型コミュニケーションはあくまでも裏の文化であり、表舞台に登場することは稀である。裏と表という関係も両立型であり、「万物に両面あり (Jedes Ding hat seine zwei Seiten.)」というドイツの諺も、何事にも裏があって当然とする日本文化にあっては、かつて犯罪が少なかった頃にいわ

れた、「人を見たら泥棒と思え」という金言と共に、存在が稀であるから注意を喚起するのである。しかし、もちろん西洋にも裏は存在する。要するに量的な関係に過ぎない。

III コミュニケーション文化の比較

1 直言文化と婉言文化

外国人留学生に日本文化について教えていて必ず彼らが述べる日本人とは、「親切で、優しく、曖昧で、おとなしい」らしい。中国人も、韓国人も、日本人学生と同じクラスにいる時よりも外国人のみのクラスにいる時の方がはるかによく発言する。欧米系外国人も概ねそのようである。皆よく発言する。自己主張も大変に強い。

彼らが休暇で一時帰国すると、母国の友人たちが「君はおとなしくなった」と言うそうである。中には母国の人々がこんなにも自己主張が強く、多弁であることに始めて気付く者もいる。いつもクラスでおとなしいのは、外国人クラスでの日本人学生か東南アジア出身の学生である。授業が英語で為されることとも関係しているのかも知れないが、彼らが積極的に発言することはほとんどない。指名されて、始めて発言する。自己主張は極めて弱い。

国による違いもさることながら、国内の地方差の違いも目立つのが普通である。中国人学生の中では、上海出身者よりも北京出身者の方が自己主張が強いし、韓国人学生の中では、釜山出身者が最も自己主張が強いという印象である。台湾人に関しては、何事にも日本人と中国人との中間という感じである。これら自己表現が強い文化を「直言文化」と呼ぶことができよう。世界の文明国の大勢は自己主張が（日本人より）強く、送り手中心のコミュニケーション形式をとる。彼らは概して、「話し上手の聞き下手」であることが多い。言語コミュニケーションに依存しながらより強力

な説得を求めて言葉を使いまくる。多弁、雄弁なのである。

ならば、日本人のコミュニケーション文化は「婉言文化」と呼ぶべきであろう。はっきりと言いきらず、言葉少なく、終わりまで言いきらずに終わることも多い。その分言葉に頼らず、コンテキストを伝えたり、読み取ってコミュニケーションを成立させている。言語への依存度が直言文化に比べて低いのである。しばしば日本人は「話し下手の聞き上手」であることが多い。「場の空気・流れ」を読んで、過度の発話を避けて、言葉少なめに話したものである。「もの言えは唇寒し秋の風」であった。しかし最近の若者達は変わった。大層饒舌になってきた。言葉の値打ちがますます下がってきた。かつては31文字や17文字の文学を発達させ、一語一語の意味を生き返らせ、「言葉少なく多くを語る」文化を育てていたのであるが。「聞き手中心の文化」であったからこそ独自の短文定型詩を育てたのではなかったか。現在の若者のコミュニケーション文化は饒舌化した。意味の薄い言葉が氾濫している。それでもやはり婉言文化と言えよう。

2 線的コミュニケーションと面的コミュニケーション

片立型志向性モードの最大の特徴の一つが線形的なコミュニケーション進行である。コミュニケーションとは時間的経過の中で発生するので、その過程（プロセス）がどのような形態であるかを求めるのは、比較をする上でも有意のものとなる。しかもこの線形的進行は単系であるのが普通であり、多系の線形がポリフォニー音楽のように同時進行することは稀である。このレトリックは説得調である。その基盤はギリシア文明以来の問答・対話の伝統がある。この様式は発信者中心である。

一方、両立型志向性モードの最大特徴の一つが点的／面的なコミュニケーション進行である。片立型が話題・議題を一点に集中して話されるのに対して、両立型では話題・議題が頻繁に変わり、あちこちに跳ぶのである。

対話者はその度に頭を切り替えなければならない。これは受信者中心のコミュニケーション様式である。

片立型は音楽の鑑賞に例えられるし、両立型は絵画鑑賞に例えることができよう。音楽は時間の芸術である。音楽の進行に合わせてその時の音を鑑賞する。それに対して、絵画鑑賞はどの部分を見るのも自由であるし、視点を変えながら全体を視覚的に占有する。ジグソーパズルも点的から面的支配へと進行する。片立型は「将棋タイプ」、両立型は「囲碁タイプ」とも言えよう。線的進行の片立型に対して、面的進行の両立型である。

3 コミュニケーション動因

コミュニケーションには動因 (drives) が認められる。誘因よりも勢いづくことでコミュニケーションを推し進める役を果たす。動因には以下の2種類がある。

- (1) 勝か負けるかに拘るヘゲモニー・タイプ
- (2) 得か損かに拘るインタレスト・タイプ

である。

これら2種のコミュニケーション動因をマトリックスにすると、

	勝ち	負け
得	1位	?位
損	?位	4位

選択の優劣関係が見えてくる。誰にとっても望ましいのは、「勝ちかつ得をする」ことが最も望ましく、また最も望ましくないのが「負けかつ損をする」ことであろう。

次に、残った2つの空欄のどちらを2位とし、どちらを3位とするか。大阪での調査では、2位には圧倒的に「負けても得をする」者が多かった

し、京都や外国人学生の間では「損をしても勝つ」を2位とする者が多かった。名誉や面子に拘る京都人に対して、実利にこだわる大阪人という構図が大学生にも現れていた。

やはり京都人は「団子より花」を選ぶし、大阪人は「花より団子」を選ぶようである。「着道楽の京都」に対する「食い道楽の大阪」は名実の優位差でもある。着道楽とは本人自らも楽しむが、大いに他人に見られること、評価されることを前提にした道楽である。それに対して食い道楽は本人自身が体験して楽しむのである。名誉の世界と実利の世界の違いである。

外国人学生は「損をしても勝ちたい」と考える者が多かった。これだけを見ると、京都人と外国人たちは同じ価値観を持っているように一見思える。しかし外国人の多くは片立型のコミュニケーションを常用するのに対し、京都人は両立型コミュニケーションを見事に使い分けるので有名である。大阪人も京都人を苦手とする者は実に多い。京都人の「スジ論」にやっつけられてしまうのである。日本語という言葉をこれほど見事に使いこなす地域は、日本広しと言えども他にないのではないか。「京のぶぶ漬け」は単なる一例にすぎない。さすがは伝統文化の都である。京風コミュニケーション文化も伝統文化なのである。

4 ホンネとタテマエ

ホンネとタテマエは両立型志向性モードの中心に陣取り、日本文化に深みと綾を与え続けている。

タテマエ文化の中心が天皇制である。今上天皇は第145世である。天皇がホンネの力を持ち、日本に君臨した例は全く少ない。本人自ら戦いマツリゴト（祭事と政治）を治めるのを止めてから既に久しい。日本の歴史の大部分は、天皇はタテマエの長（おさ）である。幕府や政府はホンネの長である。ちなみに、アメリカの大統領はタテマエとホンネを兼ねた長である。

権威の長と権力の長ということになる。

日本人の外来または海外意識もタテマエのものである。ホンネである土着または国内という構図である。島国である日本は狭く、海のソトには広い世界があることを古くから知っていたし、常にそのことを意識していた。高度文明は常に海のソトからやってきた。憧れの対象としての海外、遅れている日本。タテマエの海外、ホンネの日本。日蓮は「神国日本」と言ったが「辺土日本」とも言った。では彼は海外をどのように見ていたのか。表現の裏には「蕃神の海外」「先進の海外」という彼のホンネが隠されているのではないか。海外は忌み嫌うと共に憧れでもあったのであろう。現代日本人の対外意識とどこも変わらない。日蓮もやはり島国の人であった。

このホンネとタテマエの両立を司っているのが両立型コミュニケーションという情報処理のメカニズムである。図表3を参照していただきたい。

会社などで会議をしても活発な意見が出ないことも多い。タテマエの会議である。会社が引けて帰りに赤提灯などを見つけ、ホンネの話し合いとなることも多い。社内での会議があまりにも形式のみに流れたり、上司が先に自分の意見を述べたりすると、タテマエのみの会議となる。終業後にホンネの会議が必要となる。日本の組織では、「小天皇制」を持つ組織も多い。社長の上に実権を持たないタテマエだけの会長をおいている。

両立型の面白いところは、相矛盾するような情報や組織を消さずにそのまま裏へまわして、温存するところにある。西洋医術が入ってきても西洋医術を表に置いて、東洋医術はそのまま裏にまわすだけで、温存する。真の意味の交替がない場合が多い⁷⁾。かつて中国宮廷から入れられた雅楽が日本に来るとそのまま残り、中国本土に概にないものが日本に残っていたりする。天皇家の礼服も唐時代の中国宮廷の様式をそのまま保っていると聞く。

5 神仏習合

両立型文化の国日本には、一神教世界から見れば考えられない現象が起こる。日本は、西洋の見地によれば、「未だ多神教」世界なのである。日本の宗教は、現在も、基本的には神道と仏教の2本立てである。「慶事の神道、弔事の仏教」と使い分ける。出生誕生は神道、葬儀は仏教となる。先祖をまつるのは仏教である。どちらが欠けても日本文化とはならない。何しろ奈良・平安時代から続く神仏習合という異質間の組み合わせである。大晦日と元旦の組み合わせも神道という土着（ホンネ）と仏教という海外（タテマエ）の組み合わせでセットとなっている。

『大辞泉』によれば、「神仏習合とは、日本固有の信仰と外来の仏教信仰とを融合・調和するために唱えられた教説」を言う。神社に付属する形で建てられた仏教寺院のことを神宮寺というが、神宮寺は奈良時代には既に出現していた。「社僧（別当）が神前読経など神社の祭祀を仏式で行った。」明治元年の神仏分離令（判然令）で分立または廃絶された。

誤解のないように願うしかないのだが、ここで問題として神仏習合を採り上げたのは、本地垂迹説も権実不二説も日本の風土に両立型文化の基盤がなければ神仏習合という現象はこの地には誕生しなかったであろうということを描きおきたかったのである。

仏教渡来時に起きた崇仏開明派（国際派＝海外タテマエ派）と廃仏派（国粹派＝土着ホンネ派）との確執の後、「バスに乗り遅れるな」ということで、解決を見た。まことに日本的な解決法であった。このような現象は、日本史に繰り返し起るし、現在の、いわゆる「政治決着」と称されるものの大部分は「流れ」を読んで大勢につく方法を指す。両立型の決定は「その時」が来るまで待つので、大変時間が掛かるのが普通である。日本型ビジネスの世界でも、日本企業の決断が遅いのは有名であるし、多くのビジネス・チャンスを失っている可能性が高い。

日本のコミュニケーション再考

日本ではしばしば「日本対世界」とか、「日本対アジア」という表現を見聞きする。なるほど、この表現も両立型文化では許されても、現実、そうではない。図表5⁸⁾で比べてほしい。この表現の不正確さが明瞭となる。まだまだ「島国日本」という過去の呪縛から解き放たれてはいないのが日本の現状である。

IV おわりに

従来、コミュニケーション研究者たちは、コミュニケーションと文化との関係を、両者間関係のみで説明しようとしてきた。それに対して、筆者はそれに情報という概念を加えた3者関係でとらえるべきであると主張してきた。コミュニケーションは情報と文化との間にあって両者間の機能を司っている。コミュニケーションは機能であってそれ自体に意味があるわけではない。情報を運ぶ行為がコミュニケーションである。巷では、コミュニケーションという行為とコミュニケーションが運ぶ（であろう）情報を混同して、コミュニケーションを「望ましいもの」と誤解している節がある。殺人も戦争もコミュニケーション行為である。平和をもたらすのもまたコミュニケーションである。コミュニケーションとコミュニケーション文化も別物である。

今回の小論では、コミュニケーションの志向性というモードが異なることから起こる、異文化間コミュニケーションで筆者が最も問題が大きいと考える現象を、コミュニケーション文化という視点から展開してみた。

このインターモーダル・コミュニケーション⁹⁾に起因する問題解決の特効薬はまだ見つかっていない。本来、教育に関わる問題なのであろうが、学校教育だけでは到底無理であろうし、社会全体の改革を伴う大事業となることが予想される。しかしながら、一体全体、日本のコミュニケーション文化を意図的に変えることなどでき得ることなのであろうか。かりに、

それがかりに100年、否もっとかかって、できたとすれば、それはもう「日本文化」とは呼べないものであるかも知れない。日本という地方は、アジアのまたは世界のもっと大きな単位の文化に吸い込まれてしまっているかも知れない。

ひとまず現状では、余り遠くのことを見ないで、「彼を知り己を知らば百戦あやふからず(孫子)」ということで、片立型文化と片立型コミュニケーションを学び、戦略を立てて対処するしか方法がないのではなかろうか。

注

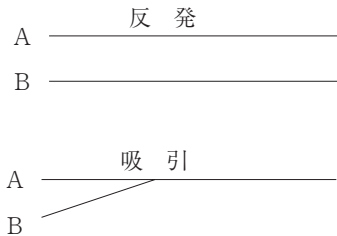
- 1) 櫻井芳雄 (2002) 『考える細胞ニューロン 脳と心を作る柔らかい回路網』, 講談社
櫻井芳雄 (1998) 『ニューロンから心をさぐる』, 岩波科学ライブラリー
脳内で情報処理がどのように行われているかについて、多くの示唆を与えてくれる。特に、細胞集成体(セル・アセンブリ)に関するヘップ仮説は参考になるところが多い。
- 2) 遠山淳 (1988a) 「文化の生成過程：その1——情報代謝モデルを考える——」 桃山学院大学『社会学論集』第21巻第2号
遠山淳 (1988b) 「文化の生成過程：その2——情報淘汰とコミュニケーション型——」 桃山学院大学『社会学論集』第22巻第1号
遠山淳 (1989) 「日本文化と両立型コミュニケーション」 『異文化コミュニケーション研究』 創刊号, 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所
遠山淳 (1992) 「日本文化の安定と変化——日本的コミュニケーションにおける対立回避の仕組み——」 桃山学院大学『国際文化論集』 第5号
遠山淳 (1995) 「日本のコミュニケーションの元型——民族史的一考察——」 『異文化コミュニケーション研究』 第7号, 神田外語大学異文化コミュニケーション 研究所
遠山淳 (1997) 『異文化コミュニケーション・ハンドブック』 共編著, 有斐閣
遠山淳 (2001) 『異文化コミュニケーションの理論 新しいパラダイムを

求めて』共編著，有斐閣

遠山淳（2005）『異文化コミュニケーション研究法 テーマの着想から論文の書き方まで』共著，有斐閣

- 3) 図表1：コミュニケーション原型。Ross, R. E. (1973): Perceived communication Patterns and Predictive Accuracy of Supervisor-Subordinate Dyads. Doctral dissertation, University of Denver. 筆者はロスの「受容と排除 (acceptance-rejection)」という考えを更に進めて，原型には「吸引と反発」という磁気モデルに達した。

図表1 コミュニケーション原型



- 4) 図表2：コミュニケーションの志向性モード (Modes of Communicative Orientation)。4種の志向性が認められるが，異文化間コミュニケーションの見地から言えば，片立型と両立型が最も興味深い。この両者が最も文化と不可分な関係を有するからである。コミュニケーション文化の核として，宗教，芸術，教育等，文化特性を形成している。

図表2 コミュニケーションの志向性

片立型：A + B → A or B

両立型：A + B → A and B

同立型：A + B → 2A = 2B

創造型：A + B → C

- 5) 図表3：コミュニケーション型。4種の志向性には合計8種の型が認められるが，コミュニケーション過程（プロセス）においては，志向性や型を移動しながらコミュニケーションの終了を迎えるが，終了時における精神および行動における変化が認められることが多い。

図表3 対人コミュニケーションの8基本型：情報代謝アプローチ

志向性	型	C	過 程			フロー	変 化		
			開始	中 間	終了		精神	行動	
①片立	対 立	A					—	なし	なし
		B						—	なし
②片立	同 化	A						なし	なし
		B						あり	あり
③片立	統 合	A						少し	少し
		B						少し	少し
④両立	分 立	A						なし	なし
		B						なし	なし
⑤両立	同 化	A						なし	なし
		B						なし	少し
⑥両立	統 合	A						なし	少し
		B						なし	少し
⑦同立	合 同	A						なし	なし
		B						なし	なし
⑧創造	異化・ 統合	A						あり	あり
		B						あり	あり

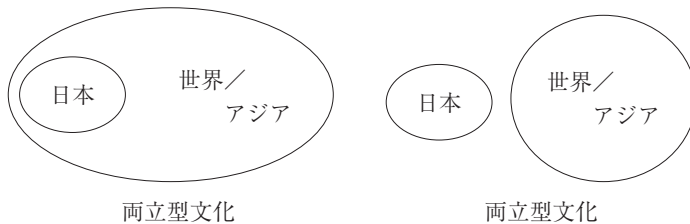
ただし、A、B、⑧のCは情報(源)；Cはコミュニケーター；斜線、太線は強い意見；空白、細線は弱い意見。モデルは脳神経細胞の機能である。

日本のコミュニケーション再考

- 6) 図表4：コミュニケーション原型から派生する4種のコミュニケーションの志向性，それに加えて志向性から派生する8種のコミュニケーション型が認められる。志向性とコミュニケーション型は文化と相互に影響関係がある。

志向性とコミュニケーション型	→ culture-bound
コミュニケーション原型	→ culture-free

- 7) 加藤周一（1975）『日本文学史序説 上』，9頁，筑摩書房
 8) 図表5：片立型文化と両立型文化における世界観



- 9) インターモーダル・コミュニケーションの例

現実的に，図3における片立型コミュニケーターAと両立型コミュニケーターBとの組み合わせとなるのが最も多い。AはBが反論なり自説／自己主張をしなくなったのでAの主張が通ったと思ってコミュニケーションを終了する。一方，Bはコミュニケーションを中止または黙殺したのであって，コミュニケーションに「敗北」したとは思っていない。両立型コミュニケーターによくある「対立の後に来る分立」の姿勢を取っているだけである。太平洋戦争終了直前に起きた日本政府によるポツダム宣言受託をめぐる「黙殺」は「対立（関係）の延長」すなわち「戦闘の継続」の選択と解釈された，と言われている。両者間の解釈には明らかに「文化的」ズレがあった。

統合型コミュニケーション（実は，国際コミュニケーション〔政府レベル，会社間レベル，集団間レベル等〕において最も頻繁に用いられる型であるが）においても，両立型は，自説を表立ってはなかなか捨てないので，これもコミュニケーション摩擦の要因となる。

‘Japanese Communication’ Revisited: On Inter-modal Communication Interference

Jun TOYAMA

Communication has a three-strata structure: the Prototypes of Communication consisting of the set of repellency and attraction as the basis for life, the four types of Modes of Orientation and the eight Patterns of Communication most frequently appearing on the surface of human life.

One usually cannot automatically change one’s communication culture even when speaking a different language from one’s own. Intercultural impediments often arise between speakers insisting on their own communication styles, especially between unimodal speakers and bimodal ones.

The feature of Japanese communication is the frequent use of bimodal communication. Other cultures, however, use unimodal communication. An overwhelming majority of the world has acclimated to the unimodal alternative (either-or) orientation. This is why, Japanese people are still suffering difficulty in communicating with people of other cultures.